

石川・堅田B遺跡

かただ

○四号線が走る。

本遺跡は国道八号線バイパス建設に伴う調査であり、一九九六年度から始まり、一九九九年度で調査終了の予定である。

- 1 所在地 石川県金沢市堅田町
- 2 調査期間 一 第二次調査 一九九七年（平9）七月～一九九八年二月 二 第三次調査 一九九八年八月～二二月
- 3 発掘機関 金沢市教育委員会
- 4 調査担当者 一 谷口宗治・向井裕知 二 向井裕知
- 5 遺跡の種類 居館跡
- 6 遺跡の年代 鎌倉時代、室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（金沢）

堅田B遺跡は金沢市北東部を流れる森下川河岸段丘上に立地する。遺跡の北側には木曾義仲が居城したと伝わる「堅田城」（標高一三三m）があり、南側には近世に加賀と越中を結び、「小原越（道）」と呼ばれた道を一部踏襲する国道三

堅田B遺跡は金沢市北東部を流れる森下川河岸段丘上に立地する。遺跡の北側には木曾義仲が居城したと伝わる「堅田城」（標高一三三m）があり、南側には近世に加賀と越中を結び、「小原越（道）」と呼ばれた道を一部踏襲する国道三

このことから、西堀の一部改変は一三世紀後半のことであり、それ以前、遅くとも一三世紀前半には当初の堀の掘削を行なつていたと考えられる。また北堀SD一一でも箱堀から薬研堀への造り替えを確認しており、詳細な検討はこれからであるが、出土遺物から一三世紀後半頃、つまり巻数板が出土した旧西堀SD〇一が埋められた頃に北堀も一度埋められ、再掘削された可能性がある。

堀を最終的に廃棄した年代は、北堀覆土の上層で出土した完形の珠洲焼鉢から、一四世紀中頃と考えられる。なお、一四世紀以降の遺物も出土しており、堀廃棄後にも遺跡は存続している。

遺跡の性格としては、大型掘立総柱建物（最大棟は五間×一〇間、約二二七m²）や堀（幅約五m深さ〇・八m）の存在、また中国産高級陶磁器や漆器絵皿、大量の土師器皿の出土などから有力者の館跡と考えられる。居館の北と西で堀を検出しており、北堀は約七〇m、西堀は約八〇m（北から約七五mで屈曲し、約一四m東に延び、再び南に向かう）を確認している。南は「小原越（道）」まで延びると想定すると、ほぼ一町程度になる。西堀の一部は居館の拡張に伴い埋め立てられているが、そこから「建長三年」（一二五二）と「弘長參年」（一二六三）の紀年銘をもつ巻数板が出土している（本誌第一〇号）。

8 木簡の釋文・内容

一 第二次調査

旧西堀SD〇一

(1) 「〔御カ〕
○願所厄一
正月八日」

224×71×6 011

包含層

(2) 「可申候
た、
如申」

・「かへる事
ほ
かとの
七次郎様あてい申
三月一日」

(87)×(62)×3 061



遺構図 (1:1000、第1～第3次調査分)

1998年出土の木簡
なお第二次調査は館の西外周部分と東の側道予定部分、第三次調査は館の西半部と東の側道部分との間で行なった。

本遺跡からは多くの木製品が出土しており、多くは堀からの出土である。今回報告する木簡も、旧西堀SD〇一と北堀SD一一から出土したものである。

二 第三次調査

- (1) は上部を小さな圭頭形に成形し、下部は直線的に仕上げてある。上部中央には径3mmほどの穿孔がある。また、正月八日という記載は本誌第二〇号報告の巻数板と一致している。
- (2) は一部しか残存していないが、折敷の表裏にかかれたものである。遺構に伴わないので年代は不明である。

(1)
「奉転読大□若經所也」
〔般〕

239×87×3 011

(2)
「南無大日如來」

(197)×29×2 061

(3)
「南無□□如來△」
〔大日〕

131×31×2 061

(4)
「▽南□□□如來△」
〔無大日〕

(147)×29×2 061

(1) 転読札である。上部を圭頭形に成形し、下部は直線的に折り、特に調整のないまま仕上げている。墨痕は明瞭である。(2)～(4)は卒塔婆であり、前回の報告においても類似品を紹介している。(2)は上部を圭頭形に成形し、下部は欠損する。墨痕は明瞭である。(3)は上部を直線的に成形し、下部には三角形状の切り込みを入れる。下端は欠損する。(4)は上部を圭頭形に成形し、端部に三角形状の切り込みを入れる。下部は直線的に仕上げ、端部には台形状の切り込みを入れる。

(向井裕知)

金沢市埋蔵文化財センターによる発掘調査で、鎌倉時代の館跡が検出され、それを取り囲む溝から卒塔婆とともに二点の卷数板が出土した、堅田B遺跡の報告書が刊行された。

卷数板は縦一一・二cm横七九・〇cmと縦一六・二cm横八二・〇cmとで、いずれも般若心経の全文を記している。前者は弘長三年(一二六三)、後者は建長三年(一二五二)の年紀をもつ。これらは正月八日、修正会の結願の日に門前に吊り下げられたものと考えられている(本誌第二〇号参照)。報告書には卷数板に関する文献・絵画・民俗資料を合わせ載せている。

A四版 三六頁 カラー印刷 一九九九年三月刊
頒価 一、一一〇〇円、送料 一四〇円

残部僅少

連絡先

石川考古学研究会

〒九二二一・二三三六 金沢市中戸町一八番地一

石川県埋蔵文化財センター内

振替口座 ○○七四〇-五一九六九一

電話・FAX ○七六一-二一九一五五二八

(埋文センターの電話 ○七六一-二一九一四四七七)